日本語版 TALE 尺度の作成および 信頼性と妥当性の検討¹

落合 勉² 小口 孝司² 立教大学

Development of a Japanese version of the TALE Scale

Tsutomu Ochiai and Takashi Oguchi (*Rikkyo University*)

The Thinking About Life Experiences (TALE) Scale (Bluck & Alea, 2011) has three subscales that assess the self, social, and directive functions of autobiographical memory. This study constructs a Japanese version of the TALE Scale and examines its reliability and validity. Fifteen items that assess the three functions of autobiographical memory were translated into Japanese. We conducted an online investigation with 600 men and women between 20-59 years of age. In Study 1, exploratory and confirmatory factor analysis identified that the three-factor structure of the Japanese version of the TALE Scale was the same as the original TALE Scale. Sufficient internal consistency of the scale was found, and the construct validity of the scale was supported by correlation analysis. Study 2 confirmed that the test-retest reliabilities of the three subscales were sufficient. Thus, this Japanese version of the TALE Scale is useful to assess autobiographical memory functions in Japan.

Key words: autobiographical memory, TALE Scale, functions, Japanese version.

The Japanese Journal of Psychology

2013, Vol. 84, No. 5, pp. 508-514

自伝的記憶は、“過去の自己に関わる情報の記憶”（佐藤・越智・下島，2008）と定義される。自伝的記憶が認知心理学の一つのテーマとして注目を浴びようになったのは1980年代以降である。それ以前の記憶研究は，Cohen（1989 川口訳 1992）が“実験室の中の100年”と記しているように，少数の例外を除き，記憶のメカニズムの一般法則に関して，その理論的問題を解明することを目的として，客観性の高い実験方法を用いた実験室研究によって行われてきた。

しかし，こうした流れは，1970年代後半に入って徐々に変化が見られるようになってきた（佐藤他，2008）。Cohen（1989 川口訳 1992）は，そうした変化

の節目となったのは，1976年の“記憶の実際の側面”に関する会議において，Ulric Neisserが行った“記憶：何が重要な問題か”というテーマの講演であるとしている。その中でNeisserは，記憶研究は生態学的妥当性を持つこと，すなわち現実世界の自然な文脈の中で生じる行動に役立たねばならないと説いた（Cohen，1989 川口訳 1992）。以降，“日常記憶”あるいは“記憶の現実的な側面”といった表現が研究のキーワードとして認識されるようになり，1986年にはRubinによりAutobiographical Memoryが編纂されることとなった。そしてそれからの20年間で自伝的記憶についての研究成果も急速に蓄積されてきた（佐藤他，2008）。

Pillemer（2009）は，特に，Baddeleyが記憶研究の根本的な疑問として“*But what the hell is it for?*”（しかしいったいそれは何のためなのか？）に取り組むことを勧告して以降，その疑問に答える中で，多くの日常生活における記憶の機能の理論的・実験的な分析が生まれ前進を果たしてきたという。

その中で，Bluck, Alea, Habermas, & Rubin（2005）は，人は単に容量や正確性を重視した情報処理装置ではなく，日常の文脈の中で情報を処理する生き物であるこ

Correspondence concerning this article should be sent to: Tsutomu Ochiai, Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University, Kitano, Niiza 352-8558, Japan (e-mail: 12um001w@rikkyo.ac.jp)

¹ 本研究は，東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センターならびに科学研究費（基盤研究(C)23530829，研究代表者 小口 孝司）から研究助成を受けて行われました。

² We wish to express our gratitude to Dr. Susan Bluck for permission to use the Thinking About Life Experiences Scale.

とを考えると、膨大な人生の記憶をなぜ貯蔵しており、何のために使うのかという自伝的記憶の使用の視点から、自伝的記憶の機能面の研究が記憶の理解に有効であるということを指摘している。実際、自伝的記憶の機能について数多くの研究がなされており、これまでの検討のなかで、自伝的記憶は、少なくとも三つの広汎な機能、すなわち自己 (self) 機能、社会 (social) 機能、方向づけ (directive) 機能に用いられるということが理論化されてきた (Bluck, 2003; Bluck et al., 2005)。

Bluck et al. (2005) は、多くの理論的な主張 (Bluck & Levine, 1998; Brewer, 1986) の中で、自己の連続における自伝的記憶の機能を強調している。これが“自己”機能である。自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像の維持を支えたりするために役立つ働きを指す。同時に、自伝的記憶の“自己”機能は過去と現在を対比させて成長を実感するのに役立つという面も考えられる (佐藤他, 2008)。

“社会”機能は、自伝的記憶が対人関係の形成・維持に役立つ面や対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼす働きを指す。社会的な結束の発達・維持・育成において、自伝的記憶の重要性が繰り返し指摘されてきている (Bluck et al., 2005)。

“方向づけ”機能は、佐藤 (2008) によると、自伝的記憶がさまざまな判断や行動方向づけに役立つ働きを指しており、判断の根拠に使用すると考えられるとしている。また、類似した過去の経験を想起したりすることで、現在の問題の解決や将来の計画策定に役立たせることも考えられる。さらに過去の経験が人を動機づけたり、態度形成に寄与したりするのも、一種の方向づけ機能であるとされる (佐藤, 2008)。

以上のような自伝的記憶の機能を測る尺度も開発されつつある。Bluck & Alea (2011) は、日常生活において個人が自伝的記憶を何のために用いるかについて、報告によってこれらの三つの機能を評定する簡潔で妥当な尺度として、15 項目からなる Thinking About Life Experiences (TALE) 尺度を開発した。TALE 尺度は、自伝的記憶の機能に関する理論的論文において使用された項目の中から、三つの機能を代表する項目を選出し構成されている。自伝的記憶が想起されると考えられる場面における、過去を振り返る頻度に関して、評定を求めるものである。

TALE 尺度の準備的研究は、人が自伝的記憶を自己、社会、方向づけの三つの機能に用いることを実証的に研究することを目的に実施された。同時に、自伝的記憶の機能について、実証的に評価する標準的な測定ツールが不足しているとの問題意識から作成された。自伝的記憶の機能を働かせる頻度について尋ねる 28 項目からなる尺度が作成された。探索的因子分析の結果、自己因子、方向づけ因子と二つの社会因子 (“新

しい関係を作る”と“既存のつながりを維持する”) の 4 因子が抽出された。二つの社会因子は、作用する時期は異なるが、本質的には関係性の強化という面において同じであった (Bluck et al., 2005)。この尺度は、本邦においても翻訳版が作成され、有効性が確かめられている (竹田・落合・小口, 2011)。

そのため Bluck & Alea (2011) は、この準備的研究を踏まえて項目の追加修正を行い、30 項目の質問紙を作成し検討した結果、最終的に 15 項目からなる TALE 尺度を作成した。

TALE 尺度を用いた研究としては、自伝的記憶の機能の若年者と高齢者の違いの研究 (Bluck & Alea, 2009)、性格特性と自伝的記憶の研究 (Rasmussen & Berntsen, 2010)、自伝的記憶使用の因子構造のデンマーク人・ドイツ人の比較 (Rasmussen & Habermas, 2011: 28 項目版を使用) などがみられる。本邦においても、日常記憶のメタ記憶に関する質問紙を用いた研究は、清水・高橋・齊藤 (2006) による特定の記憶行動や記憶経験、記憶現象などがどの程度の頻度で生じするかを調査する日常記憶質問紙、認知的失敗質問紙や個人の全般的な記憶能力を調査する記憶能力質問紙を用いた研究などがみられる。しかし、自伝的記憶を機能の面から調査する TALE 尺度については、その標準化も未だ実施されておらず、TALE 尺度を用いた研究はほとんど見られない。

そこで本研究では、Bluck & Alea (2011) の TALE 尺度の日本語版を作成することを目的とする。そのため TALE 尺度の日本語訳を行い、その因子構造を確認するとともに、その妥当性を確認するため、目標意識尺度 (将来への希望・将来目標の有無)、邦訳版自己概念の明確性尺度、Big Five 尺度 (外向性・情緒不安定性) との関連を検討する (研究 1)。さらに TALE 尺度日本語版の信頼性を確認するため再検査信頼性を検討する (研究 2)。

研究 1

目的

TALE 尺度の邦訳版を作成し、その因子構造を確認するとともに、収束的および弁別的妥当性を確認するため、TALE 尺度質問項目の導入質問として実施する“過去について考える全体的な頻度”、“過去について話す全体的な頻度”、目標意識尺度 (将来への希望・将来目標の有無)、邦訳版自己概念の明確性尺度、Big Five 尺度 (外向性・情緒不安定性) との関連を検討する。“過去について考える全体的な頻度”は内省することとの結びつきから、自己機能、方向づけ機能との相関が高く、“過去について話す全体的な頻度”は、社会機能との相関が高いことが予測される。自分の将来に希望が持てていない人ほど、将来を方向づけるた

めに、より頻繁に方向づけ機能を使用すると予測した。また自己概念の明確性の低い人は、自己機能を果たすために、より頻繁に記憶を使用すると考えた。自伝的記憶の社会機能との収束的妥当性を示すために、Big Five 尺度の“外向性”を使用した。外向性が高い人は、社会機能の使用頻度が高いと考えられる。過去についての熟考や長話は、機能的にみると、日常においてよりよい方略を探したり、関係性を維持したりするなどの活動とかかわりがある。本尺度が、精神的不健康のサインと弁別されることを示すために、“情緒的不安定性”を用いた。“情緒不安定性”は、自伝的記憶のどの機能とも無関係であると予測した。

方 法

調査期間 2011 年 12 月。

調査参加者 Web 調査会社 株式会社インスパイア（調査依頼先：現在の社名はユナイテッド株式会社である。以下現在の社名は略す。）が、サンプリングした全国の 20 代・30 代・40 代・50 代の男女各 75 名、計 600 名が参加した。調査参加者の職業は、公務員（カッコ内は調査参加者に対する割合を示す：5.0%）、自営業（6.5%）、自由業（3.7%）、会社員（合計 41.1%（経営・役員：1.8%、管理職：4.8%、一般：26.8%、派遣・契約・嘱託：7.7%））、学生（4.3%）、専業主婦（14.2%）、アルバイト・パート（12.7%）、無職（9.3%）、その他（3.2%）の区分であった。

調査票 個人属性（性別・年齢・職業・職種）と以下に説明する TALE 尺度、目標意識尺度、邦訳版自己概念の明解性尺度、Big Five 尺度により構成されていた。

TALE 尺度：Bluck & Alea（2011）の作成した TALE 尺度を日本語に訳して使用した。TALE 尺度は、自伝的記憶の三つの理論的機能を評定する 15 項目（自己機能 5 項目・方向づけ機能 5 項目・社会機能 5 項目）から構成される尺度である。

日本語訳の作成は、以下の手順で進めた。英語原版の翻訳許可を原著者から得た上で日本語に翻訳した。職業翻訳家によるバックトランスレーションを実施し、意味合いの違いがないことの確認を受けた。その後項目内容の確認を行い、日本語の質問項目を完成させた。

二つの導入質問（“通常、あなたはどのくらいの頻度で、あなたの人生について振り返って考えますか”、“通常、あなたはどのくらいの頻度で、あなたの人生で起こったことについて、他の人に話をしますか”）の後、“示されている理由のために、どのくらいの頻度で、あなたの人生について振り返って考えたり話したりするかを示す回答を一つお選びください”という形で各質問項目が提示された。回答は“ほとんどしない（1）”から“非常に頻繁にする（5）”の 5 件法で求

めた。“全くない”場合は、“ほとんどしない（1）”を選択するように教示した。

目標意識尺度：自伝的記憶の方向づけ機能に対する収束的妥当性を確認するため、都筑（1999）が作成した目標意識尺度を使用した。目標意識尺度は、“将来への希望”、“将来目標の有無”、“時間管理”、“計画性”、“将来目標の渴望”、“空虚感”の六つの下位尺度を持つ。今回の調査では、このうち“将来への希望”下位尺度を使用した。“将来への希望”下位尺度は、“自分の将来は自分で切り開く自信がある”、“私は、将来、人生で最も重要な価値をもつことが実現されると確信している”など 10 項目から構成されており、“全くそう思わない（1）”から“とてもそう思う（5）”の 5 件法で回答を求めた。

邦訳版自己概念の明確性尺度：自伝的記憶の自己機能との収束的妥当性を示すため、徳永・堀内（2010, 2011, 2012）が、Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Levallee, & Lehman（1996）の作成した自己概念の明確性尺度（Self-Concept Clarity Scale）に基づいて作成した邦訳版自己概念の明確性尺度を使用した。邦訳版自己概念の明確性尺度は、自己概念の明確性（個人の自己概念の内容や自己についての信念が、明瞭に確信を持って定義され、内的な一貫性を持ち、通時的に安定している程度を表す概念）を測定するための 12 項目から構成される尺度である。“私が持っている自分自身に関する信念は、しばしば、互いに矛盾する”、“私は自分の性格のいろいろな側面に矛盾を感じることはめったにない”などの項目について、“全くそう思わない（1）”から“とてもそう思う（5）”の 5 件法で回答を求めた。

Big Five 尺度：和田（1996）が作成した Big Five 尺度を使用した。Big Five 尺度は、“外向性”、“情緒不安定性”、“開放性”、“誠実性”、“調和性”の五つの下位尺度を持つ。今回の調査では、“外向性”と“情緒不安定性”の二つの下位尺度を使用した。“外向性”下位尺度は“話好き”、“陽気な”などの 12 項目、“情緒不安定性”下位尺度は“悩みがち”、“不安になりやすい”などの 12 項目から構成されており、“まったくあてはまらない（1）”から“非常にあてはまる（7）”の 7 件法で回答を求めた。

手続き 先述した Web 調査会社に依頼し、調査参加者のサンプリングならびに Web 調査を実施した。

結果および考察

項目分析 TALE 尺度の各項目について項目分析を行った。“非常に頻繁にする”を 5, “しばしばする”を 4, “時々する”を 3, “めったにしない”を 2, “ほとんどしない”を 1 として得点化した。TALE 尺度の質問項目の全体平均は 2.17（標準偏差 0.80）であり、評定可能な範囲の中間より小さい値であった。しかしながら、“過去について考える全体的な頻度”（平均値

Table 1
TALE 尺度の各項目の平均値, 標準偏差値ならびに因子分析表

項目	M	SD	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
第 1 因子：自己継続機能 ($\alpha = .89$)					
自分の信念が、時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかるとき	2.15	1.03	.84	.01	.03
以前の自分からどのように変化したかを理解したいとき	2.14	1.02	.76	.08	.04
自分の価値観が、時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかるとき	2.17	1.02	.62	.15	.12
第 2 因子：行動方向づけ機能 ($\alpha = .86$)					
自分の過去の誤りから学びたいとき	2.48	1.11	.10	.81	-.04
過去に学んだ教訓を思い出したいとき	2.42	1.08	.11	.78	.00
人生の選択をする必要があるが、どちらの道を選ぶべきか確信がもてないとき	2.37	1.10	-.05	.59	.27
第 3 因子：社会的結合機能 ($\alpha = .77$)					
対人関係において親密さをもっと深めたいと思うとき	2.14	1.03	.02	.04	.77
友人と記憶を共有し、友情関係を保ちたいとき	2.21	1.06	.14	.02	.63
TALE 尺度 ($\alpha = .93$)					
	因子間相関行列		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
	第 1 因子		—	.79	.76
	第 2 因子			—	.75
	第 3 因子				—

2.85, 標準偏差 0.99), “過去について話す全体的な頻度” (平均値 2.15, 標準偏差 0.97) と同様の傾向であり, 当該行為自体の頻度が高くないためであると考えられる。米国で実施された原版 (全項目平均値 3.14, 標準偏差 0.63) との対比では, 1 評点程度の差があり, 自伝的記憶の使用に関わる文化的な違いがあることも考えられる。さらに厳密に分析するために, 分析にあたっては, フロア効果 (平均値 - 標準偏差値 < 1) を示した 2 項目を削除した。

探索的因子分析結果 フロア効果の見られた 2 項目を除いた 13 項目について探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。TALE 尺度は, 3 因子構造を前提にして作成されている。そのため, 因子の解釈可能性を考慮し, 因子数を 3 因子に指定して分析を行った結果, 原版において報告されている 3 因子構造と一致する解釈可能な因子構造が示された。因子間相関係数はいずれも高かった (Table 1)。項目の選択に当たっては, いずれかの因子に 0.35 以上の因子負荷があり, それ以外の因子には 0.35 以上の負荷がないという基準とした。それに該当しない 4 項目ならびに因子負荷が 1 を超えた 1 項目を削除した。

第 1 因子は, 原版において自己機能を評定するために設定された 5 項目のうち “自分の信念が, 時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかるとき”, “以前の自分からどのように変化したかを理解したいとき”, “自分の価値観が, 時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかるとき” の 3 項目に高い因

子負荷が示されており, 原版と同様 “自己継続機能” 因子と命名した。第 2 因子は, 原版において方向づけ機能を評定するために設定された 5 項目中 “自分の過去の誤りから学びたいとき”, “過去に学んだ教訓を思い出したいとき”, “人生の選択をする必要があるが, どちらの道を選ぶべきか確信がもてないとき” の 3 項目に高い因子負荷が示されており, 原版と同様 “行動方向づけ機能” 因子と命名した。第 3 因子は, 原版において社会機能を評定するために設定された 5 項目のうち “対人関係において親密さをもっと深めたいと思うとき”, “友人と記憶を共有し, 友情関係を保ちたいとき” の 2 項目に高い因子負荷が示されており, 原版と同様 “社会的結合機能” 因子と命名した。

内的一貫性をみるために α 係数を算出したところ自己継続機能が .89, 行動方向づけ機能が .86, 社会的結合機能が .77, TALE 尺度全体が .93 であり, 高い内的一貫性が示された (Table 1)。

確認的因子分析結果 因子構造および項目の選定について確認するため, 三つの仮説モデルによる確認的因子分析を実施した。仮説モデルは, 原版と同じ 15 項目を用いた 15 項目モデル, 15 項目モデルからフロア効果項目を削除した 13 項目モデル, 探索的因子分析の結果に基づく 8 項目モデルの三つである。それぞれのモデル適合度を算出した結果, すべての指標において, 探索的因子分析結果に基づく 8 項目モデルの適合度が最も高かった (Table 2)。それゆえ 8 項目版を日本語版 TALE 尺度として採用し, 以降で妥当性およ

Table 2
TALE 尺度の確認的因子分析結果

	CMIN	CMIN/DF	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
15 項目モデル	489.491	5.626	.898	.859	.088	555.491
13 項目モデル	318.053	5.130	.923	.887	.083	376.053
8 項目モデル	30.949	1.821	.987	.972	.037	68.949
原版	177.990	2.050	.920		.060	

Note. GFI: Goodness of Fit Index; AGFI: Adjusted GFI; RMSEA: Root Mean Square Error of Approximation; AIC: Akaike's Information Criterion
 原版: Bluck & Alea (2011)

Table 3
TALE 尺度と各尺度の相関係数

TALE 尺度	全体的な頻度		Big Five 尺度		目標意識尺度	自己概念の 明確性尺度
	過去について 考える	過去について 話す	外向性	情緒不安定性	将来への希望	
自己継続機能	.39**	.23**	.01	.28**	-.06	-.29**
行動方向づけ機能	.41**	.19**	-.04	.35**	-.12**	-.32**
社会的結合機能	.26**	.31**	.11*	.21**	-.03	-.24**

** $p < .01$, * $p < .05$

び信頼性を検討する。なお、確認のために、Bluck & Alea (2011) の対応する適合度指標を記載しておく。原版よりも 8 項目版の方がすべての適合度指標が高い。このことから 8 項目版を採用することが妥当であろう。

収束的妥当性および弁別的妥当性 収束的妥当性および弁別的妥当性は、TALE 尺度質問項目の導入質問として実施された“過去について考える全体的な頻度”、“過去について話す全体的な頻度”、目標意識尺度下位尺度である“将来への希望”、邦訳版自己概念の明確性尺度、Big Five 尺度の下位尺度である“外向性”および“情緒不安定性”との相関を求めて評価した。その結果を Table 3 に示す。

自己継続機能尺度は、“過去について考える全体的な頻度”と“過去について話す全体的な頻度”に有意な正の相関係数を示した。二つの相関係数の差を検定したところ、前者の相関 ($r = .39$) が後者 ($r = .23$) より強いことが明らかになった ($CR = 3.12, p < .01$)。過去に対して内省することと関係していると考えられる。また、自己概念の明確性尺度とは、有意な負の相関があり、自己概念の明確性が低い人は、自己の継続性を作り出す時に、自己概念を明確にするために、より頻繁に自伝的記憶を使用すると考えられる。“将来への希望”、外向性とは、相関が見られなかった。

行動方向づけ機能尺度は、“過去について考える全体的な頻度”と“過去について話す全体的な頻度”と有意な正の相関係数を示した。二つの相関係数の差を検定したところ、前者の相関 ($r = .41$) が後者 ($r = .19$)

より強いことが明らかになった ($CR = 4.21, p < .01$)。過去に対して内省することと関係していると考えられる。過去について考え話すために、自伝的記憶を頻繁に使用すると報告した人は、現在や将来の行動を導くための知識や情報を過去の経験から学ぶために、記憶を頻繁に使用すると考えられる。また、“将来への希望”とは有意な負の相関が示され、将来への希望を持っていない人ほど、将来や行動を方向づけるために、行動方向づけ機能を頻繁に使用すると考えられる。一方で、行動方向づけ機能下位尺度は、外向性のような関連が予測されなかった構成概念とは有意な相関係数が見られなかった。

社会的結合機能尺度も“過去について考える全体的な頻度”と“過去について話す全体的な頻度”と有意な正の相関係数を示した。しかし二つの相関係数の差を検定したところ、有意な差は見られなかった ($CR = 0.95, ns$)。社会的つながりのためには、考えることと同様に話すという外向的な面が影響し、行動を方向づけ、自己の継続性を維持するためには、過去を話すことよりも個人的な熟考と関連していることは、一般的な行動と考えられる。相関係数の差を検定したところ、“過去について考える全体的な頻度”との相関係数 ($r = .26$) は、他の二つの機能下位尺度との相関係数(自己継続機能 $r = .39$, 行動方向づけ機能 $r = .41$) より相関が弱いことが明らかになった(自己継続機能との比較: $CR = 2.52, p < .05$, 行動方向づけ機能との比較: $CR = 2.93, p < .01$)。自己への指向性が他の二つよりも低いことを示していよう。一方、社会的

結合機能尺度は、他の二つの機能には見られなかった外向性との有意な相関が見られたことで、予測したように、収束的妥当性が示された。

情緒不安定性については、本研究では、三つの機能ともに有意な正の相関が示された。竹田・小口（2010）は、自伝的記憶を繰り返し想起することが、メンタルヘルス、特に、抑うつレベルに影響することを示している。自伝的記憶の想起頻度が高いことが、情緒的不安定性に影響することも考えられるが、原版では、どの機能とも有意な相関は見られていないことを考えると、文化による違いの検討も必要であろう。

研究 2

目的

日本語版 TALE 尺度の信頼性を確認するため再検査法による信頼性の検討を行う。

方法

調査期間 調査 1 の 1 ヶ月後（2012 年 1 月）に実施。

調査参加者 Web 調査会社 株式会社インスパイアが、調査 1 の参加者のうち、男女各 50 名、計 100 名をランダムに抽出し、再度同様の調査を行った。調査参加者の年代は、20 歳代 13 名、30 歳代 31 名、40 歳代 30 名、50 歳代 26 名であった。

調査参加者の職業は、公務員（カッコ内は調査参加者に対する割合を示す：1.0%）、自営業（8.0%）、自由業（9.0%）、会社員（合計 48.0%（経営・役員：2.0%、管理職：5.0%、一般：31.0%、派遣・契約・嘱託：10.0%））、学生（2.0%）、専業主婦（13.0%）、アルバイト・パート（9.0%）、無職（5.0%）、その他（5.0%）の区分であった。

調査票 調査 1 と同じ調査項目について調査を行った。

手続き 前述の Web 調査会社に依頼し、調査参加者のサンプリング並びに Web 調査を実施した。

結果および考察

日本語版 TALE 尺度の再検査法による信頼性を検討するために、調査 1 と調査 2 の測定値間の相関係数を求めたところ、全体が $r = .53$ ，“自己継続性機能下位尺度”が $r = .47$ ，“行動方向づけ機能下位尺度”が $r = .54$ ，“社会的結合機能下位尺度”が $r = .47$ 、（いずれも 1% 水準で有意）であり、中程度の相関が認められた。日本語版 TALE 尺度は、一定の再現性を備えているものと考えられた。

総合考察

本研究では、TALE 尺度（Bluck & Alea, 2011）の日本語版を作成し、二つの調査を通じてその妥当性と信

頼性を検討した。研究 1 では、日本語版 TALE 尺度が原版と同じく 3 因子構造を構成し、各下位尺度とも十分な内的一貫性を持つことが確認された。また三つの下位尺度とも今後の研究に用いられることができる程度の収束的妥当性および弁別的妥当性を示していた。研究 2 では、再検査法による日本語版 TALE 尺度の信頼性の検討では、必ずしも高くはないものの中程度の相関が示され、一定の再検査信頼性を備えているものと認められた。

以上の結果は、本研究で作成した日本語版 TALE 尺度が、妥当性および信頼性について一定の水準を満たしていることを示すものである。本邦においても、自伝的記憶の機能を評定する際、日本語版 TALE 尺度を活用することができるものと考えられる。ただ 3 因子構造は確認されたが、因子間の相関が高い点は、原版と異なっている。特定のエピソードのレベルでは、複数の機能を担う可能性が指摘（Bluck, 2003; 佐藤他, 2008）されていることも考慮した検証が必要である。あわせて、各項目の評定の平均が、原版のそれと大きな差が生じていることに関しても、文化差の検討が求められよう。妥当性の検討において、当初予測と異なる結果が示された尺度との関係について別の調査対象を用いた再検討、再検査信頼性について Web 調査の特性の影響の有無も含めての検討などが今後の課題である。

日本語版 TALE 尺度は、特に異なるグループ間での記憶の機能的な使用を体系的に調査する場合に有効であろう。例えば、越智（2008）は、日常記憶の継続的な変化についてのデータは必ずしも十分に蓄積されていないと指摘しているが、その調査の一つとして、年代グループ別の比較に用いることがあげられる。そのほか、性格特性との関係や本研究でも示唆された文化間での違いの調査などに用いることが可能であると考えられる。これまでに行われてきた TALE 尺度を用いた研究としては、自伝的記憶の機能の若年者と高齢者の違いの研究（Bluck & Alea, 2009）、性格特性と自伝的記憶の研究（Rasmussen & Berntsen, 2010）、自伝的記憶使用の因子構造のデンマーク人・ドイツ人の比較（Rasmussen & Habermas, 2011）などがあげられるが、本邦のサンプルを用いたものはほとんどないのが現状であり、本尺度は今後の研究において有用であろう。

引用文献

- Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**, 113–123.
- Bluck, S., & Alea, N. (2009). Thinking and talking about the past: Why remember? *Applied Cognitive Psychology*, **23**, 1089–1104.
- Bluck, S., & Alea, N. (2011). Crafting TALE: Construction of a measure to assess the functions of autobiographi-

- cal remembering. *Memory*, **19**, 470–486.
- Bluck, S., Alea, N., Habermas, T., & Rubin, D. C. (2005). A tale of three functions: The Self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition*, **23**, 91–117.
- Bluck, S., & Levine, L. J. (1998). Reminiscence as autobiographical memory: A catalyst for reminiscence theory development. *Aging and Society*, **18**, 185–208.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. New York: Cambridge University Press, pp. 25–49.
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavalley, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 141–156.
- Cohen, G. (1989). *Memory in the real world*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- (コーエン, G. 川口 潤 (訳) (1992). 日常記憶の心理学 サイエンス社)
- 越智 啓太 (2008). 日常記憶 太田 信夫・多鹿 秀継 (編著) 記憶の生涯発達心理学 北大路書房 pp. 259–270.
- (Ochi, K.)
- Pillemer, D. B. (2009). Twenty after Baddeley (1988): Is the study of autobiographical memory fully functional? *Applied Cognitive Psychology*, **23**, 1193–1208.
- Rasmussen, A. S., & Berntsen, D. (2010). Personality traits and autobiographical memory: Openness is positively related to the experience and usage of recollections. *Memory*, **18**, 774–786.
- Rasmussen, A. S., & Habermas, T. (2011). Factor structure of overall autobiographical memory usage: The directive, self and social functions revisited. *Memory*, **19**, 597–605.
- 佐藤 浩一 (2008). 自伝的記憶の構造と機能 風間書房 (Sato, K.)
- 佐藤 浩一・越智 啓太・下島 裕美 (編著) (2008). 自伝的記憶の心理学 北大路書房 (Sato, K., Ochi, K., & Shimojima, H.)
- 清水 寛之・高橋 雅延・齊藤 智 (2006). 日常記憶に関する自己評価の分析——メタ記憶質問紙による検討—— 心理学研究, **77**, 366–371.
- (Shimizu, H., Takahashi, M., & Saito, S. (2006). Analysis of self-assessment of everyday memory using metamemory questionnaires. *Japanese Journal of Psychology*, **77**, 366–371.)
- 竹田 葉留美・落合 勉・小口 孝司 (2011). 自伝的記憶の機能についての検討 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 95.
- (Takeda, H., Ochiai, T., & Oguchi, T. (2011). A study of function of autobiographical memory. *Proceedings of the 75th Annual Convention of the Japanese Psychology Association*, 95.)
- 竹田 葉留美・小口 孝司 (2010). 過去の出来事がメンタルヘルスに及ぼす影響 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 312.
- (Takeda, H., & Oguchi, T. (2010). Effect of the remembrance of past events on a mental health. *Proceedings of the 74th Annual Convention of the Japanese Psychology Association*, 312.)
- 徳永 侑子・堀内 孝 (2010). 自己概念の明確性尺度邦訳版の作成および妥当性・信頼性の検討 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 364–365.
- (Tokunaga, Y., & Horiuchi, T.)
- 徳永 侑子・堀内 孝 (2011). 自己概念の明確性尺度邦訳版の作成および妥当性・信頼性の検討 (2) ——増分妥当性の検討—— 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 61.
- (Tokunaga, Y., & Horiuchi, T. (2011). Development of Japanese version of the Self-Concept Clarity Scale (2): Incremental validity. *Proceedings of the 75th Annual Convention of the Japanese Psychology Association*, 61.)
- 徳永 侑子・堀内 孝 (2012). 邦訳版自己概念の明確性尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, **20**, 193–203.
- (Tokunaga, Y., & Horiuchi, T. (2012). Development of a Japanese Version of the Self-Concept Clarity (SCC) Scale. *Japanese Journal of Personality*, **20**, 193–203.)
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望——構造モデルの心理学的検討—— 中央大学出版部 (Tsuzuki, M.)
- 和田 さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61–67.
- (Wada, S. (1996). Construction of the Big Five Scales of personality trait term and concurrent validity with NPI. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 61–67.)

—— 2012. 11. 17 受稿, 2013. 5. 4 受理 ——